

5 プネウマ～”吹く”という事

笛の中には、呼子笛のように実用的なものもある。

が、ヒンズー教のクリシュナ神が吹くのは横笛であり、古代ギリシャのパン神がシリックスの葦で作ったのが、パンの笛である。

古来さまざまな民族において、笛には呪術的な意味が与えられてきたといわれる。

管楽器はいうまでもなく、楽器に息を吹き込んでこれを鳴らす。奏者の息が音となるわけである。

ところがこの「息」は単なる気流ではなく、人間にとって特別な意味を感じるものだった。「息」は“生命”、“靈魂”の象徴でもあったのである。

旧約聖書において〈霊〉（ヘブライ語でルーアハ ruah、ギリシャ語でプネウマ Pneuma）は、本来は〈息〉を意味する。

— 主なる神は土のちりで人を造り、命の息をその鼻に吹き入れられた。

そこで人は生きた者となった。— （創世紀2.7）

また古代インドのバラモン教にも、次のような讃歌がある。

— 紅のめぐみの光世を照らし、暁のうるわしの姫は出でましぬ。

遠き世もかくてありき、来る世もかくてありなん。

目ざめよ、もろ人、命の息はよみがえる。闇は去り、光は満つる。

暁の姫の御手は日の神を招くなり。

神は永久なり、人も永久なり。— （リグ・ヴェーダより）

管楽器奏者の優れた演奏には、弦楽器やその他の演奏にはない、一種切実なフレーズ感と表情をたたえる瞬間がある。この楽器が、「息」を吹き込むという発音原理をもつがゆえかと、しばしば思わされる。